

渡邊誠さんが卒論で『神町キャンプ地返還期成同盟日誌 解読作業報告書』を取り上げることに決め、実際に手にとったのは、4年生の10月中旬のことだった。卒論提出まで3ヶ月ちよつとである。

3年生の末ごろから数ヶ月間、彼は芋煮をテーマに卒論を書こうと試みてきていた。山形県に生まれ育ち、そして県内の大学を卒業する。それにもかかわらず名物の芋煮についてよく知らない。ほとんど研究もされていない。そこで芋煮の成立史を解明しようと志を立てたのだ。公刊された芋煮関係文献はすべて読んでいた（と言ってもわずか数冊しかない）。

ところが残念なことに、芋煮史の探究は壁にぶつかった。芋煮の分布等を調べて卒論にすることも可能だが、ルーツを究めたかった彼には不満らしかった。そこで卒論提出まで残り少ない時期にあきらめるという決断を下したのである。

それでは何をテーマに書こうか。指導教員の私が相談に乗った。山形県に関わるテーマがよいだろう、資料調べにおいても、土地勘においても、地元が有利である。もともと軍事に強い関心を持ち、知識も豊富な彼には、軍事関係のテーマがよいのではないか。大高根の演習場、真室川の飛行場など、県内の軍事史関係地が候補に挙がった。

そのうちに私は、ある大学院生から個人的に見せてもらった神町関係の資料のことを思い出した。個人のメモをタイプ印刷した物のようだが、解説もなく、パラパラとめくって拾い読みをしてみても、わけがわからない。それが『神町キャンプ地返還期成同盟日誌 解読作業報告書』だった。関心のある彼ならば、読んで理解できるかもしれないと考えた。彼は話に乗ってきた。

幸いにして、所蔵者から長期間拝借することができた。そして彼もまた、すさまじい集中力をもって何度も読み込み、登場する団体をめぐる込み入った関係を解きほぐし、時間的な推移を理解していった。

10月末以来、卒論指導の大部分は、ややこしい話を私や学生にわかるように説明してくれ、ということに費やされた。わかりやすく説明するためには、書き手は相当に理解しなければならぬ。説明の組み立て方法も練らなければならない。『報告書』を読んだ人だけしかわからない言葉で書いてもしょうがない。

丁寧に防衛庁や県庁に問いあわせたり、元の新聞にまで当たったりしたようだ。作成執筆期間の短時間記録は褒められる話ではないが、ここまで可能だという見本になる出来ばえであると考え、推薦することにした。